

中国社会科学院世界宗教研究所との共同シンポジウムより

創価学会インタナショナルの宗教間対話

川田洋一

一 序——宗教間対話の要請

新たな世紀を迎えた二〇〇〇年の二月十一日、創価学会第二代会長の名を冠した研究所、戸田記念国際平和研究所は、日本の沖縄において、「文明間の対話」をめぐるシンポジウムを行っている。

シンポジウムの内容のレポートである『文明間の対話』の出版にあたり、テヘラニアン (Majid Tehrani) 所長は「人類が生き残るために今、必要なのは、対話・協議、そして我々自身の時代の課題にふさわしい価値

創造に向けての意思交流の経路をすべて開通させることである⁽¹⁾」とのべている。

戸田研究所は、これまで、ヒューマン・セキュリティ (人間の安全保障 Human Security) とグローバル・ガバナンス (地球社会の運営 Global Governance) をテーマとする研究プロジェクトを推進しており、今回のシンポジウムでは、その結果の発表とともに、文明間の対話をも中心にすえている。

具体的には、八つの文明論がレポートされている。即ち、先住民の伝承、ヒンドゥー教、仏教、ユダヤ教、

キリスト教、イスラム教、バハイ教と非宗教的な人間主義の代表発表である。

テヘラニアン所長は、イスラム教徒であるが、私は仏教徒の代表として出席した。そこで私は、『法華経』の「葉草喻品」の「三草二木」の譬えをひいて、仏教の「文化多元主義」を論じ、合わせて創価学会インタナショナルの現代の菩薩道としての活動にも言及している。

また、『文明間の対話』のなかで、チュービンゲン地球倫理財団会長ハンス・キューン (Hans Küng) 教授は、「平和実現へのアジェンダ (課題) を達成するにあたって『文明間対話』が必要条件である」との序文を寄せている。この論文で教授は、四つの指針を示し、「宗教間対話」の方向性を示している。四つの指針を紹介すると、次の通りである。

- ① 「宗教を信じる者と信じない者とが相互に尊重しあい、連合しなければ、民主主義は存在しない」
- ② 「宗教間の平和がなければ、国家間、文明間の平和はない」

〇一年に入って、九月十一日の同時多発テロを経験している。池田SGI会長は、直ちに、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教等の代表者とともに、仏教者としての見解を発表している (『灰の中から (From the Ashes, A spiritual response to the attack on America)』)。

そこで会長は、仏教に説く「生命尊厳」の思想に立脚して、まず、あらゆるテロ行為への反対を表明している。「生命をいとも簡単に踏みにじるテロは、どんな大義や主張を掲げようとも、絶対悪である。ましてや宗教の名においてテロが行われたとしたら、それは宗教の自殺行為であろう」と。

その後、宗教者の立場から、憎悪が新たな憎悪を生み、報復が新たな報復を生む「憎悪の連鎖」の歴史を転換するための方途として、「文明間の対話」による人間の「善性」の開発を呼びかけている。即ち、「人間生命には、憎悪や破壊のエネルギーとともに、慈愛や創造のエネルギーも内在しているのだから、その「善性」を呼びおこす「対話」をねばり強くつづけるべきであろう」と主張するのである。

- ③ 「宗教間の対話がなければ、宗教間の平和はない」
 - ④ 「地球倫理なくして、新しい世界秩序はない」
- こうして教授は「宗教間の平和」を達成するための「宗教間の対話」の主軸として「地球倫理」の形成を主張している。その「地球倫理」の内実については、次のようにのべている。

「ただし、このような倫理は、新奇的なイデオロギーである必要はない。様々な宗教や哲学の一定の倫理は無用ではなく、たとえばモーゼの十戒、イエスの『山上の垂訓』、ムハンマドの『コーラン』、インド伝承の『バガヴァッド・ギーター』、釈尊の説法、孔子の語録等に変わる倫理があるというのでもない。一定の地球倫理とは、人類の共通の価値観、人類が生存しうる規範、基本的な生活法を必要最小限に集約したものに他ならない」と。

私も、「地球倫理」の形成は、「宗教間対話」の主軸の一つであると考えているので、仏教者の視座からの見解は後述する。

さて、世界は、国連の「文明間の対話」の年の二〇

SGIは、同時多発テロの直後、ヨーロッパ科学芸術アカデミーと「四大宗教間対話」をオーストリアのウィーンで行っている。九月十五日、私もSGIの代表として出席したが、アカデミーのウンガー (Felix Unger) 会長が、会議の冒頭で「四日前に同時多発テロが起き、世界的規模の紛争の危機が高まっている。この緊急事態にあたり、テーマを変更して、人間の内面にある攻撃性、破壊性について、各宗教で話しあいたい」との提案があり、このテーマにそつての「対話」となっている。ここに集まった四大宗教とは、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、そして仏教である。

仏教を代表して、私の方からは、次のような主旨の内容を発表した。仏教では、唯一創造神を立てる西洋の三つの宗教とは違って、「生命の尊厳」の思想の基盤として、すべての人間生命に具備された「仏性」——宇宙生命を洞察し、これを顕現することをめざしている。そして、人間の破壊性、攻撃性の基盤を、「貪」——貪欲性、搾取性、「瞋」——憎悪、攻撃性、「癡」——根源的エゴイズムとして説き、これらを克服し、

「善心」を顕現するための方途を、大乘仏教では菩薩道として宣揚していることを話した。また、「宗教間対話」の共通の地平を、それぞれの宗教の創始者の精神におくことを主張した。

ここに集まった各宗教の創始者は、民衆の不幸を解決し、平和を創出しようと努めている。モーゼ、キリスト、そして釈尊は、文字通り非暴力を貫いたし、イスラム教の創始者であるムハンマドは、今日の意味でいえば、自衛のために戦ったとはいえ、人々の幸福と平和を希求していた。宗教間対話の地平として、創始者の心、原点の心から出発すべきではなからうか。

二 SGIの思想的基盤——「原点の心」

SGIは、仏教団体の一つとして、その「原点の心」が、釈尊の菩提樹下の悟達にあることはいうまでもない。そこでSGIの思想的基盤として、釈尊から、今日のSGIまでの思想的系譜をたどっておきたい。

仏教は、紀元前五世紀頃、その創始者である釈尊が出家成道したところから開始された宗教である。釈尊

ある。

釈尊は、宇宙それ自体の源泉となる「根源的な生命」を自己自身の内奥に覚知したのである。

それでは、釈尊の悟達の究極に位置する「宇宙生命」とは、いかなる悟りの内実をさすのであろうか——「ウダーナ (Udana)」にうたわれる内容に、解脱の原点が示されている。⁽⁷⁾

夕暮れ、真夜中、そして夜明けに、釈尊の口から出てきた詩である。

「夕暮れの詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれは縁の法を知っているから」

「真夜中の詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれはもろもろの縁の消滅を知ったのであるから」

の出家の主要な動機は、「生」「老」「病」「死」の四苦という普遍的な「人間苦」を解決することであつたという。釈尊は、苦行、禪定によって、人間生命を包む生きとし生けるものの源泉をなす「宇宙生命」を覚知して、覚者となった。そして釈尊は、すべての人に、自己と同じく、この「宇宙生命」を覚知させて、四苦を超越しながら、人間としての真実の幸福境涯を確立する道を指し示したのである。

釈尊は、菩提樹の下で「自我意識」を基点としての「内なる宇宙」の探求を行っていた。すなわち、自身の、一個の人間生命の内面へと入っていったのである。「自我意識」から「内なる宇宙」の深層領域へと深まるにつれて、探求は、個人の次元を超えて、トランスパーソナル(超個 Transpersonal)な領域へと入っていく。すなわち、家族、友人等の心と通底する次元、民族、国家の次元、さらには人類心の次元にまで深まり、拡大していく。次いで生態系と共通する地平へ、そして、地球という惑星、恒星の生死流転の次元をも突破して、宇宙それ自体と一体となるところまで進んでいくので

「夜明けの詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、かれは悪魔の軍隊を粉碎して安定している。あたかも太陽が虚空を照らすごとくである」

ここにいう「ダンマ (dhamma)」とは宇宙の根源的なものであり、即ち、「宇宙生命」の表現である。「ダンマ」の顕現は、根源の煩惱である無明(悪魔の軍隊)の断破と同時にあり、ここに「涅槃」の境地が開示される。

釈尊の悟達——それは、釈尊の人格体そのものである「内なる宇宙」を、宇宙根源の生命即ち「ダンマ」が、一切の無明、煩惱を粉碎し、「あたかも太陽が虚空を照らすごとく」照明しつくす大境地である。ここにおいて、「内なる宇宙」は、「外なる宇宙」と一体不二となっている。

玉城康四郎氏は、「ダンマ」について、「『ダンマ』とは全く形のない、いのちの中のいのち、いわば純粹生命ともいふべきものである」と表現されている。⁽⁸⁾ この「ダンマ」は、「如来」とも同質であると、玉城氏は

いう。⁽⁹⁾この「ダンマ」が「如来」として大乘仏教の基盤ともなり、一切衆生における成仏の根拠である「仏性」「如来蔵」として展開されていくのである。

「ダンマ」を覚知した釈尊は、八十歳で入滅するまで、東インドの各地を歩きに歩き、衆生救済の慈悲行に生き抜いたのである。この意味において、仏教は「智慧の宗教」であり、その「智慧」は「慈悲」となつて発現していくのである。

さて、釈尊の滅後およそ百年ないしは二百年たった頃、仏教教団は上座部と大衆部に分裂した（根本分裂）。その後、紀元前一世紀頃までに、約二十のグループに分裂した。この分裂以後の仏教を部派仏教と呼んでいる。部派仏教の主体は出家者であり、それぞれの学問的な教義を確立していったが、ともすれば学問仏教に偏つていった。その結果、民衆救済をおろそかにし、宗教としての生命を枯渇させていった傾向性は否定できないところである。

大乘仏教は、紀元前一世紀頃から、煩瑣な思弁に陥つた伝統的・保守的な部派仏教の一部を激しく批判し

ながら、一切衆生の成仏（救済）を掲げての新たな運動である。この過程で、多くの経典が編まれたが、そのなかの初期経典として『法華経』がある。大乘仏教は「在家中心」であり、釈尊の前世における呼び名である「菩薩」の慈悲行に仏教の根本を見出し、「菩薩」の道を宣揚するとともに、「ダンマ」においても、釈尊の悟達そのものにかえり、「宗教的真理」を開示しようとしたのである。

大乘仏教を推し進める人々は、独自の「覚体験」をなし、その禅定の中で「仏との出会い」（見仏体験）をなしたのである。その「覚体験」の「中核」を、『法華経』では「無上正等覚」として記している。菅野博士氏は、『法華経』は釈尊の悟りの原点を自覚的にふまえて成立している⁽¹⁰⁾という。『法華経』では、「菩薩」のために「無上正等覚」の悟りの法門を説くと宣言している。『法華経』は、「見仏体験」により、「ウダーナ」でうたわれた「太陽」としての「ダンマ」を、「無上正等覚」として覚知することをめざす経典である。

創価学会の仏教的伝統では、釈尊を源流とし、『法華

日蓮は、『法華経』が「一切衆生」の成仏のための経典であるとの本義から、唱題行というすべての人々に実行可能な修行法を示したのである。

日蓮や天台によれば、『法華経』の「宝塔品」から、「虚空会」の儀式に入り、「從地涌出品」での「地涌の菩薩」の出現を経て、「寿量品」が説かれ、「久遠本仏」の生命がさし示されていく。

創価学会の第二代会長の戸田城聖は、獄中において悟達体験をなすのであるが、その中核となったのが、「涌出品」「寿量品」を含む「虚空会」の儀式である。つまり、戸田は、獄中において、『法華経』と天台と日蓮をつなぐ「一念三千」の法理を、現代的に「生命」と表現し、その「内なる宇宙即外なる宇宙」の悟達の境地をあらわにした。そして、悟達の究極を『法華経』に即して「虚空会」の儀式として体得したのである。その悟達の境地から、戸田は、涌出品に示される「地涌の菩薩」としての使命を覚知するのである。

日蓮はすべての民衆を救済するために「虚空会」の儀式をかりて「久遠の本仏」と一体不二の「曼荼羅」

経』を依経として、「ダンマ」即ち宇宙生命は、中国の天台、日本の伝教、日蓮へと継承されていると考えている。日蓮は、インドの釈尊、中国の天台、日本の伝教という「法華経」の仏教者の系列の中に自己を位置づけ、「三國四師⁽¹¹⁾」と呼んでいる。

中国の天台は、六世紀後半、インドから中国へ伝えられた各種の経典を『法華経』を中心に統合し、仏教の統一を試みている。それと同時に、『法華経』の法理を、「一念三千論」として哲学体系化したのである。

「一念三千論」は、衆生の一念に含まれる諸法（現象世界）が三千種の世間という内的構造から構成されていることを体系的に示したものである。円融円満の世界観であり、それを観照することを成仏のための修行としたのである。

天台は、そのための修行を『摩訶止観』で説き、成仏への修行法としたのである。日蓮は、天台の「一念三千論」を継承しながらも、実相の内的構造の理論という天台の解釈をふまえて、一切衆生のための成仏の法理として、具現化するのである。

をあらわしたのである。

SGIは、戸田の獄中体験に表象されているように、「釈尊」——「法華経」——中国の天台、日本の伝教、日蓮へと継承されゆく仏教の「原点の心」を、二十一世紀の今日、人類社会へと開いていく使命を自覚している団体である。

三 宗教間対話のあり方

——積極的寛容について

SGIは、釈尊の「原点の心」を引き継ぎ、今日の他宗教との対話を志すのであるが、それでは、いかなる姿勢で、「宗教間対話」を行おうとするのであるか。池田SGI会長は、そのあり方を「積極的寛容」と表現している。

「積極的寛容」にもとづく宗教間対話のあり方と目標について述べていく。まず第一に、対話の前提として、それぞれの宗教が創始者の「原点の心」に帰っていくことである。

宗教とは本来、一方では「永遠なるもの」「普遍なる

もの」を探求し、それとの調和を求めるものであり、と同時に、他方では、「今」「ここに」実存する人間存在に取り組むものである。換言すれば、永遠なる「真理」と、変転しゆく「現実」とを結びつける崇高なる営みが宗教である。宗教に関わるものは、理想とすべき永遠普遍の「真理」と、時代に制約された「現実」との往復作業のなかで、理想を現実化し、現実の上に理想を実現していかなければならない。

それ故に、現実の諸宗教は、歴史的・社会的条件に対応して、そこに理想を顕在化していくことが要求される。しかし、特定の時代状況への適応は、やがて、変転する時代への不適応に陥り、固定化した現実の宗教が理想の実現を阻害しゆくおそれを常にはらんでい

ることを意味している。

いずれの宗教も、時代・社会の変転、差異に応じて、創始者の精神——「原点の心」が実現されているかどうかを常に反省しつつ、自己変革を成し遂げていく努力が要請されるのである。

このような大前提に立つて、第二には、各宗教が

「相互理解」につとめる段階に入るのである。それぞれの宗教は、独自の信仰体系とその基盤となる思考体系をもっている。そこに、各宗教の「独自性」と「信仰の確信」があり、互いに尊重しなければならない領域である。しかし、「寛容」とは、単に、それぞれの信仰体系を尊重しあうにとどまらず、他の宗教を理解しようとして互いに努力する行為をさすのである。

それは、他の宗教の主張に謙虚に耳を傾けるとともに、他者の立場に自己を移して考えてみることもである。自己の宗教の思考体系から身を離し、他者の宗教の立脚点に立つてみる。その時、自己の立場からでは理解できない事柄が、了解されてくるのである。それぞれの宗教が、他者の立場に身をおく時、宗教間の「共通性」と「相異性」が確認されてくるであろう。

各宗教が、「永遠不変なるもの」との調和、対応からくみ出した内実には、「独自性」とともに、多くの「共通性」が浮かびあがってくるはずである。「独自性」の尊重とともに、「共通性」の確証が、「寛容」の第二段階である。

第三には、自己の宗教の「創造的發展」である。「相異性」ないしは「独自性」の尊重は、他の宗教を理解し、さらには了解する姿勢を示し、自己の宗教を客観化する視点を得ることでもある。それは、自己の宗教を成立させている体系の基盤を拡大することを意味する。他者の思考をとり入れ、思考の枠を拡大することによって、自己の宗教のさらなる創造が可能になるのである。このような「寛容」の第三段階とは、積極的に他者の「知識」と「智慧」を吸収し、他の宗教的英知との関わりのなかで自己変革をなしゆく行為をさすのである。

第四段階として、今日の「宗教間対話」の目標が位置づけられる。今日の各宗教の人類に対する存在意義は、互いに協力して「地球的・人類的課題」の解決につくすことである。地球的問題群が噴出する今日においては、すべての宗教は、まず第一に、「人類存続のため」という目標が掲げられなければならない。すべての宗教の「共存」は、人類的課題に取り組む「協調」へと向けられる積極的なものでなければならない。

宗教の「相互理解」も、自己の宗教の「創造的変革」も、今日においては、人類存続へと集約されなければならない。「積極的寛容」とは、人類的課題に挑戦しつつ、世界平和と地球文明の創出のために、それぞれの宗教のもつ英知を生かしあうことではなからうか。

四 人類的課題への挑戦

新たな世紀に入った人類をおおう課題は、人間自身を取り巻く三つの領域のすべてに及んでいる。

人間と人間——「社会的領域」では、核問題、テロと紛争、経済格差と貧困、人権抑圧等があり、人間と自然——「生態学的領域」では、地球温暖化に代表される生態系の破壊に直面している。

そして、この二つの領域の中心には、第三の領域として、「人間精神」の衰退、崩壊がある。無気力、暴力性の爆発、心の病の蔓延、それに関連する麻薬の流行が、教育の分野にまで及んでいる。また、長足の進歩をとげる情報科学、遺伝子次元の科学を制御しうる倫理が問われている。

宗教的にいえば、それぞれの宗教のもつ、各種の「戒」が、それにあたるであろう。

仏教における「戒」の第一には、「不殺生戒」があげられる。不殺生戒とは、生き物を殺すことを禁じる戒で、ガンジーの非暴力運動（アヒンサー）と語源を同じくする。生命尊厳の倫理であり、仏教では最高の倫理規範と位置づけている。一神教においても「人を殺してはならない」という倫理は重要であろう。

第二に、不倫盗戒とは、自己の食欲のために他者の物を盗んではならないという戒である。自己の食欲さにより他人を不幸に陥れてはならない。他者の不幸のうえに自己の幸福を求めてはならないということである。

第三に不邪淫戒とは、直接的にはよこしまな男女関係を規制するものである。しかし、この戒の基盤となっているのは、男女の平等性である。現代に広げている、ジェンダー（gender）をはじめ、人種、職業、民族、貧富等のあらゆる差別を克服していかなければならないということである。

特に、現今では、二〇〇一年九月十一日に象徴されるようなテロ行為並びに憎悪の連鎖による紛争への対処が急務である。SGI会長が提言しているように、憎悪と報復の連鎖を断ち切るためには、ねばり強く、あらゆる次元で「文明間対話」「宗教間対話」を重ね、人間精神に内在する「善心」を開発していかなければならない。

「宗教間対話」の主軸となるのは、「生命の尊厳」の理念である。テロ、紛争、地球破壊等として噴出する人類的課題の底に流れるのは「生命の尊厳」性に対する軽視ないしは冒瀆という、現代社会の「病理」である。創始者の「原点の心」で確認したように、すべての宗教の基盤には、「生命尊厳」の思想が息づき、民衆平和への志向性をもっている。それ故に、「宗教間対話」による「協調」は、それぞれの宗教のもつ「生命の尊厳」の理念を中核として、「普遍的倫理」をともに形成していくことであろう。

ハンス・キューン教授のいうように、人類に普遍的な「地球倫理」とは、人類共通の価値観をさしている。

第四に、不妄語戒とは、嘘を禁じる戒である。他人をたぶらかし、自己の利益にしてはならないということである。逆に言えば、真実を語ってはじめて異なる文明間や民族間でも信頼を得られるということである。

各宗教の「原点の心」においては、このような倫理規範は共通している。世界宗教といわれるような宗教間だけではなく、アメリカやカナダの先住民、オーストラリアのアボリジニ、日本では沖縄やアイヌの人々の倫理規範にも共通している。

五 一つの事例と今後の課題

現在、SGIが行っている「宗教間対話」のなかで、最も長く、継続的に行われている事例を一つ報告し、あわせて、今後の課題に論及する。それは、「序」でも述べたヨーロッパ科学芸術アカデミーとの「対話」である。

その第一期は、「キリスト教と仏教」間の対話であった。「仏教とキリスト教」の対話は、それぞれの信仰の基盤をなす「東洋的思考」と「西洋的思考」の対話と

いう形をとっている。仏教は、東洋諸民族の心を養い、西域の諸民族の文化の華を咲かせ、中国、朝鮮半島、日本、東南アジアの文化の形成に大きな影響を与えてきた。

一方、キリスト教は、ギリシャ思想とともに、近代西洋文明、科学技術文明を築きあげてきた。東洋諸民族の精神を貫く宗教的思考の一つが仏教であり、西洋の一神教の思考を代表する宗教がキリスト教であろう。さて、東洋的思考の特徴は、自己（内なる宇宙）と大宇宙（外なる宇宙）との融合——「宇宙即我」として要約されよう。仏教においては、前述したように、釈尊の悟りが、自己の生命の内奥において、自己を超越し、大宇宙と一体となった——その悟達体験から、覚者の「智慧」と「慈悲」が民衆へとあふれ出ていったのである。

それに対して、西洋的思考の代表としてのキリスト教においては、唯一絶対の創造神を立て、神と被造物としての人間との関係を説く「啓示の宗教」である。

この意味において、シンボジウムは、思考体系の相

違——「智慧」と「啓示」という相違にもかかわらず、人類的課題の克服へ向けての、数々の「共通点」を発見しないしは確認できたことは、大いなる成果であった。シンボジウムでの検討を経て浮かびあがってきた「共通点」は、次の通りである。

第一には「慈悲と愛」である。仏教の慈悲とキリスト教の愛は、一方は、「ダンマ」（宇宙生命）の縁起の智慧の発現であり、他方は、神の愛と隣人愛という違いはある。しかし、ともに、人類の救済へと向かう宗教的内実をもっている。仏教の慈悲は、万物の縁起性を基盤とすることにより、一切衆生に及ぶ普遍性を獲得している。大乘仏教の菩薩道とは、縁起の智慧に基づき慈悲行の実践である。

イエスの説く愛も、「敵を愛し、迫害する者のために折れ」（「マタイ」*9:13*）とあるように、人間一般への愛である。キリスト教倫理のゴールデン・ルールといわれる、「すべて自分にしてもらいたいことは、あなたにもそのようにせよ」（「マタイ」*22:39*）という言葉は、広く人類に呼びかけたものである。

第二に、人間の「苦悩」の克服である。人間の根源苦を説明するための思想的基盤は違っている。仏教では、「煩悩・業・苦」の三道として記述されるように、

人間苦の基盤に、煩悩（無明）と、その刻印としての悪業を洞察している。一方、キリスト教においては、人間の苦の原因を、「悪」としてとらえ、その根拠に「原罪」を記述している。このような相違があつたにしても、生老病死の「人間苦」に焦点を合わせ、その苦悩を根源から転換しようとする宗教的行為は同じである。

第三に「死」を直視していることである。両宗教ともに、現世における幸福が、それにとらわれている限り「無常」であることを示している。人間は有限なる存在である故に、どのような現世的栄華も夢・幻のごときものである。そのような宗教的認識は、人生の内容を評価する基準としての、「永遠なる次元」と一体である。

仏教でいえば、今世における菩薩的生き方が、倫理性を高め、今世と未来世の幸福を将来とする。キリスト教においては、神の心になつた倫理的生き方

が「天国」の門を開くという。つまり、「死」を直視することにより、物質的・社会的欲望を超えた精神的生き方へと導くのである。

現代文明が物質偏重、現世主義にかたより、精神・魂の領域、永遠なる世界を忘却し、もしくは無視する傾向があるのに対して、両宗教のもつ「死生観」こそ、再評価されなければならないであろう。

第4に「人間の尊厳」「生命の尊厳」の理念である。人類的課題と宗教との接点において、両宗教が、それぞれの立場から「人間の尊厳」と「生命の尊厳」の思想的基盤、並びにそのあり方を提示しえたことは、きわめて重要である。

大乘仏教では、尊厳性の基盤に、すべての人間にそなわる成仏（「ダンマ」の開頭）の可能性——「仏性」「如来蔵」を置いている。一方、キリスト教では、尊厳なる所以を「神による創造」に求めている。このような相違はあるにしても、人権、価値、地球環境という今日的課題を越えゆく宗教的接点を提示しえたことになるであろう。

「人権」は第一世代（自由）、第二世代（平等）、第三世代（連帯）へと展開している。また「価値」は多様化するとともに、一方では、「物質的価値」に偏重し、「精神的価値」が消失し、それによって、物質文明のなかで地球生態系が破綻に瀕している。人権や価値の課題には「人間の尊厳」が深く関わり、地球環境問題の基盤には、「生命の尊厳」の消失がある。「人間」と「生命」の尊厳性の重要性和その復興のための理論的基盤を相互に確認しえたと思われるのである。

これが第一期のまとめであるが、第二期の冒頭には、二〇〇一年の同時多発テロがあり、また、シンポジウムもイスラム教、ユダヤ教を加えての検討に入っている。今、その総括の段階である。

今後の課題としては、第一には、人類的課題の内容として、遺伝子工学（生命工学）、情報科学の引き起こす問題——人間の生と死、生命倫理——にも項目を広げることである。第二には、仏教とキリスト教以外の偉大なる宗教とのさらなる「対話」へと発展することである。

東洋においては儒教、道教、ヒンドゥー教等があり、西洋においてはイスラム教、ユダヤ教等が、まずあげられよう。このような「対話」の努力の継続のなかに、魂の蘇生、精神の活性化を可能にする、宗教性に輝く「精神文明」をとともに築いていく道が開かれるのである。

【注】

- (1) マジッド・テヘラニアン、デイヴィッド・W・チャペル (David Chappel) 編『文明間の対話』潮出版社、二六ページ。
- (2) 『妙法蓮華法華経並開結』（創価学会版）、二四一—二四二ページ。
- (3) マジッド・テヘラニアン、デイヴィッド・W・チャペル編『文明間の対話』潮出版社、一ページ。
- (4) 同書、三一—四ページ。
- (5) 『聖教新聞』二〇〇一年十月三十一日付。
- (6) 同紙。
- (7) 玉城康四郎訳『仏教を貫くもの』大蔵出版、四一—二二二—二七二ページ。
- (8) 玉城康四郎『仏教の根底にあるもの』講談社学術文庫、二二—二七二ページ。

(9) 同書。

(10) 菅野博史『法華経の出現』大蔵出版、一六ページ。

(11) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会版、五〇九ページ。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)